黄表紙『龍都四国噂』論

――二代目市川八百蔵の役割について――

古庄るい

［キーワード：①黄表紙　②朋誠堂喜三二　③二代目市川八百蔵　④追善物　⑤平賀源内］

一　先行研究

朋誠堂喜三二（本名：平沢常富）は、享保二十年（一七三五）に江戸の寄合衆家士の西村家で生まれ、十四歳で秋田藩江戸邸平沢氏に養子入りする。天明二年（一七八二）から秋田藩の江戸留守居役となり、同四年からは留守居役筆頭として幕府と藩をつなぐ重役の藩士であった。一方で、同藩の俳人佐藤晩得と交流を持ち、若い頃より俳諧（俳名：雨後庵月成）や漢詩を学ぶほか、歌舞伎や吉原にも通じ、自ら「宝暦の色男」と称したという。(1) このような喜三二の文芸・芸能・風俗等に対する造詣の深さは作品に反映されていく。先行研究で言われる喜三二の作風は、恋川春町ほどの鋭さはないものの、芸能・風俗を取り上げ、複数の既存の物語を綯い交ぜた荒唐無稽な筋立てであっても、細部の設定に気を配っているというところが特徴とされる。(2)

喜三二は安永二年（一七七三）に洒落本『当世風俗通』で戯作界に登場したとする説があり、安永五年からは吉原細見の序文を毎年のように執筆した。そして、安永六年に『親敵討腹鞁』（恋川春町画、鱗形屋孫兵衛板）他六作品を刊行してから、『栄花程五十年蕎麦価五十銭見得一炊夢』（北尾重政画ヵ、蔦重板、安永十年刊）、『太平記万八講釈』（北尾重政画ヵ、蔦重板、天明四年刊）などの評判作を手掛け、『文武二道万石通』（喜多川行麿画、蔦重板、天明八年刊）で絶筆するまで、黄表紙の代表的な戯作者の一人として活躍する。特に安永期は黄表紙の嚆矢とされる『金々先生栄華夢』（鱗形屋孫兵衛板、安永四年刊）の画作を手掛けた春町を画工とした作を多く出しており、喜三二も春町と並び黄表紙の礎を築いた人物と言っても過言ではない。その他、手柄岡持の名で天明狂歌壇にも参入し、黄表紙から離れた後も狂歌作者としての活動は続けていた。

このように、黄表紙の刊行当初からすでに名の知れた戯作者として活躍し、評判になった作をいくつも生み出した喜三二は、山東京伝や式亭三馬、曲亭馬琴など後代に活躍した戯作者たちにも大きな影響を与えていった。したがって、喜三二自身もまた何に影響を受け、そこからどのように物語を生成していったのかを喜三二の作品を読み解きながら検証していくことは、黄表紙というジャンルがいかに確立されていったかを理解する上でも重要である。

その一つの試みとして、本稿では『龍都四国噂』（画師不詳、[3] 蔦喜板、安永九年刊）を取り上げる。本作は童謡「四国猿」や童話「猿のいきぎも」、玉取り説話、安永六年に両国で行われた「とんだ霊宝」の話などを吹き寄せ、綯い交ぜた作品である。そのあらすじを以下に示す。

「四国猿」の佐治兵衛は四国遍路の折に木の又に干されていた柿（実は猿の生き胆）を食べて猿（以下、佐治兵衛猿と表記。）になる。唐から淡海公に贈られた面向不背の玉が鰐鮫に奪われ、海中の「とんだ霊宝」の

開帳に出される。佐治兵衛猿は亀（擬人化されている）の誘いで竜宮に行き、役者の物まね芸[4]を披露する。乙姫は竜宮城に佐治兵衛猿らを招き、猿回しを見ているうちに亀が市川八百蔵に似ていたことから恋に落ちる。一方、乙姫に一目惚れした佐治兵衛猿は亀を打擲し、八百蔵に扮して乙姫と契るが、後朝で猿だと発覚して乙姫は気の病になる。猿の生き胆が効くと聞き、佐治兵衛猿は自ら腹を裂いて胆を献上すると人の姿に戻る。折しも、面向不背の玉を取り戻しに竜宮にやってきた海女と遭遇し、佐治兵衛は空いた腹に玉を入れて共に陸へ帰還する。佐治兵衛は淡海公の家来となって子孫繁栄し、海女は国母となる。亀も竜宮に婿入りし、乙姫と結ばれる。

先行研究では、本作が影響を受けている作品として、平賀源内作の談義本『根南志真佐』（宝暦十三年〈一七六三〉刊）、『放屁論』後編（安永六年作、九年刊）、恋川春町作画『其昔龍神噂』（『四分ろく分』鱗形屋板、安永七年刊カ）が言及されている。[5] また、類話に『当世四国猿』（鳥居清長画　伊勢治板、安永六年刊）や『四国猿後日曲馬』（同上）などもある。[6] その他、『龍都四国噂』の影響を受けた作品として蝸牛房屯ト作『立帰猿人真似』（蔦屋板、天明三年刊）が挙げられている。[7]

『龍都四国噂』の刊行背景について、浜田義一郎氏、鈴木俊幸氏は本作が安永九年に蔦屋重三郎が蔦喜の名で初めて黄表紙を手掛けた看板作品の一つであったと説明する。[8] また、作品評価では森銑三氏が『黄表紙解題』上（中央公論社、一九七二年）の中で、

古い玉取り説話と、新しいはやり謡とを結びつけ、佐治兵衛の腹の内へ、面向不背の玉を収めて上るといふのが、黄表紙一流の趣向で、奇を極める。強ひて三巻十五帳に纏めるために、本筋になほむだな筋を附加へてゐるものだから、全体的には散漫な感じなものにしてしまつて居り、その点が惜しく思はれる。

と述べており、評価する部分はあるものの、なお厳しい見解を取る。

一方、井上隆明氏は『喜三二戯作本の研究』（三樹書房、一九八三年）の中で、

他愛のない赤本種だが、喜三二流の明快な洒落、付合がさらりと生かされ、「ちぎる」のきわどい語もさりげなく、江戸前仕立てである。

と述べており、昔話を取り入れた古風な筋立てながら、細部まで気を回しつつ軽快さもあることを評価している。森銑三氏、井上隆明氏は作品構成や素材について言及し、子供向けの素朴な題材を用いながらも、黄表紙として大人が読むに堪える作であるとは評価している。[9] さらに、中村正明氏は四国猿に取材した黄表紙群の中で最も童謡の内容を活かした一作として論じている。[10]

ただ、このように一定の評価があるにも関わらず、喜三二の作品の中では知名度が比較的低い作であった。実際、同年刊行の喜三二作『鐘入七人化粧』や『廓花扇之観世水』は、四方山人作『菊寿草』（天明元年刊）の批評において両作とも「若女形之部　上上吉」[11] に入っており、安永十年に『鐘入七人化粧』は『鐘入七人化粧瀧返柳黒髪』として、『廓花扇之観世水』は『円通誓大通光運開扇子花』として改題再板されている。それに対し、『龍都四国噂』は当時の評に名を連ねず、改題本も確認されていない。それ故に、喜三二研究の中で取り扱われる機会が多くなかったのかもしれない。

しかし、『龍都四国噂』は先述の通り、蔦重の看板作品として刊行されたものである。内容についても、『親敵討腹鞁』や『桃太郎後日噺』（恋川春町画、鱗形屋孫兵衛板、安永六年刊）など、刊行時に高い評価を受けた作品と同様、昔話を土台にしつつ、謡曲や当時の風俗を取り入れるなど様々な趣向を凝らした作である。知名度が低いのは凡作であったからとは考えにくく、『龍都四国噂』の評価には未だ議論の余地が残されている

だろう。

本稿では作中において、佐治兵衛が扮する「八百蔵」に着目する。後述するが、ここでいう「八百蔵」とは安永六年に夭折し、当時多くの人々から惜しまれ話題になった二代目市川八百蔵のことである。彼を作中で取り上げることの意味や物語全体の構造における役割について述べていく。

また、「八百蔵」との関連から補足として、役者の死を取り上げた談義本『根南志具佐』と比較し、『龍都四国噂』がどのように影響を受けたのかも具体的に見ていく。井上隆明氏は『喜三二戯作本の研究』において「猿の生き胆は源内『根南志具佐』五之巻、『放屁論』後編に載る昔話で、その改変作になろう」と指摘しているが、特に『根南志具佐』との関連については「八百蔵」の作中での扱いを確認することによって、もう少し深いつながりも見出せよう。喜三二は洒落本『古朽木（ふるくちき）』の序文で「根なし草根無きにあらず」と語ったように、戯作に大きな影響を与えたとされる平賀源内の作品に影響を受けた一人であったことは既に指摘されてきた。『龍都四国噂』にもその影響が見受けられるならば、喜三二の作風を考える意味でもより厳密に見ていく必要がある。喜三二の黄表紙作品群における本作の位置づけとして、源内の戯作を意識した代表作の一つであることを明確にし、本作の再評価にもつなげていきたい。

二　物語の素材としてみる「八百蔵」

前章で紹介した森銑三氏の評価では、「強ひて三巻十五帳に纏めるために、本筋になほむだな筋を附加へてゐるものだから、全体的には散漫な感じなものにしてしまつて居り、その点が惜しく思はれる」とあった。森

氏は「むだな筋」がどの部分なのかを具体的に示されてはいないが、猿になった佐治兵衛が八百蔵に扮する場面については『黄表紙解題』上の中で言及されていない。確かに、物語の展開において柱となる玉取り説話や「猿のいきぎも」といった既存の物語を扱った場面に比べると、特記する事項ではなかったのかもしれない。しかし、この場面は佐治兵衛、亀、乙姫の三角関係を示すとともに、荒唐無稽でありながらも複数の既存の物語を綯い交ぜて一作品とする重要な繋ぎにあたり、そこにこそ喜三二の独創性が表れていると考えられないだろうか。そのために本作における「八百蔵」の役割について再検討する必要があると思われるのである。

そこで、佐治兵衛、亀、乙姫の恋のいざこざが描かれている場面を中心に、「八百蔵」が物語の中でどのように描かれているのか、また素材としてどのような背景を持っているのかを確認していく。

なお、『龍都四国噂』の本文引用の際には適宜濁点、句読点を補い、漢字に変換した仮名は振り仮名として補った。また、台詞の主体は（　）で示し、内容は「」で括った。掲載画像の題は所蔵館の表記に従って示した。

㈠一枚目の八百蔵

まず、本作中で亀が役者絵に描かれた八百蔵に似ていると話題になる場面を取り上げる。

乙姫、猿の芸を御慰みに見給はんとて、ある時召されしに、佐治兵衛役者の身ぶりを思入れしてお目に掛けんと言ふを、猿回しの亀は兼ねて焼きもちを焼く男故、龍王の御城にては役者の身ぶりは叶わずと偽り、一通りの猿の芸ばかりお目に掛けける。

（腰元海鼠）「あの猿回しは一枚絵の八百蔵によふ似ましたね。」

乙姫猿回しの亀、絵に描きし八百蔵に似たりとて、人知れず思ひ染め給ふ。（七丁ウ）

ここで注目すべきは乙姫の隣に座る腰元海鼠の台詞中の「一枚絵の八百蔵」および詞書きの「絵に描きし八百蔵」（以下、「一枚絵の八百蔵」とする）である。物語後半では、「一枚絵の八百蔵」に似ている亀と乙姫、佐治兵衛猿の三角関係が生まれ、佐治兵衛猿が乙姫のために生き胆を献上するという「猿のいきぎも」につながる筋となる。したがって、海鼠のこの台詞はその後の展開における重要な伏線になっていると考えられる。また、『龍都四国噂』において「四国猿」と玉取り説話は冒頭からそれぞれに物語が進行していくが、これらの話が合流するのが、物語のクライマックスである、乙姫を救うために佐治兵衛自らが裂いた腹の傷に面向不背の玉を入れる場面である。そのため、乙姫の気の病の原因が八百蔵の似姿から始まる一連の恋愛沙汰であったことを踏まえると、『龍都四国噂』における八百蔵の存

図１『竜都四国噂』七丁ウ八丁オ
（国立国会図書館蔵）＊八丁オ左上の人物が八百蔵似の亀。

図２『竜都四国噂』九丁ウ
（部分）（国会図書館蔵）

在は決して小さくないといえる。

では、その「八百蔵」とは誰を指すのか。先行研究での言及は特にないが、本文にある次の会話から、二代目市川八百蔵と考えられる。[12]

（佐治兵衛猿）「某は日本にて市川八百蔵と申もの。乙姫さまを見ぬ恋に憧れ、日本をば死んだ分にして遥〳〵と参りました。どうぞ乙姫様にお目見へがしたいが、良い知恵はなますの生け盛り、海月さん。」

（海月）「俺も門番だから、ちと検問さへしたら、首尾は吉村屋となりそふなものだ。」（九丁ウ）

まず、八百蔵に扮した佐治兵衛猿の台詞についてである。黄表紙は当世の話題を素材として用いる特徴を持つことから、『龍都四国噂』に登場するのが安永八年九月に襲名したばかりの三代目八百蔵であっても不思議ではなかった。しかし、台詞にある「乙姫さまを見ぬ恋に憧れ、日本をば死んだ分にして遥々と参りました」を見る限り、『龍都四国噂』中で既に現世では亡くなっていることから、二代目だと考える方が自然であろう。

実際、安永六年に病の為に四十三歳の若さで亡くなった二代目八百蔵は多くの人々、特に婦女からその死を惜しまれたという。

此八百蔵、其頃役者中の美男にて、婦女としてひいきせざるはなく、中車うせたる初七日、婦女の参詣多く、浅艸近辺のしきみの花、売切れしと、京山母の物語りきゝぬ[13]

（京山『蛛乃糸巻』弘化三年〈一八四六〉成立）

七月三日、優人市川八百蔵中車死す。都中の者会葬する輩数千人。古来俳優の者死してより斯る盛なる事を聞かず。治遊の少年、淫蕩の婦女、老姑を失へるが如し。法号実応中車眞解浄土といふ。小本其面かげ、草のしら露、冥土のみやげ、蟹牡丹、きのふけふに出たり[14]

（新場老漁〈大田南畝〉『半日閑話』巻之十三、成立年不詳）

次に、同丁の海月の台詞中、「首尾は吉村屋」とあるが、これは「首尾は良し」との掛詞になっている文言である。そして、この「吉村屋」とは二代目八百蔵の屋号であった。

以上の二点から、本作で取り上げられているのが二代目八百蔵だと確認することができるのである。

ちなみに、黄表紙で触れられる二代目八百蔵に関しては『龍都四国噂』に影響を与えたとされる黄表紙『其昔龍神噂』においても、百足が乙姫を口説く台詞に「おれが心にしたがひなさると、まずはるきやうげんの中車がしうちをうち御簾で見せやす」（六丁オ）とある。中村正明氏はこの「中車」が二代目市川八百蔵であり、右記の台詞も二代目八百蔵が実際に出演した狂言を踏まえたものだと説明している。[15] 両作ともに八百蔵を作中に取り入れることにより、相思相愛の関係にある乙姫と男の間に割り込むような構図を生み出している点は共通する。

(二)追善物との関連性

ここまで、『龍都四国噂』中において二代目八百蔵がどのように取り上げられているかを確認してきた。本作で安永六年に夭折した二代目八百蔵を物語の素材としたことには大きな意味がある。

二代目八百蔵が亡くなった当時、その死を悼む多くの人々の気持ちは追善草双紙や小本類（追善本）や追善の摺物（「死絵」）などの出版物によって共有されたようだ。[16] 例えば、追善の摺り物類では現存最古の作品として、浅野秀剛氏により紹介された『二代目市川八百蔵の死絵』[17]がある。同氏は本作品の解説において、柳沢信鴻作『宴遊日記』別録（安永二年―寛政元年〈一七八九〉成立）に二代目八百蔵が死亡時に追善本や死絵が出

回ったという記述を紹介するほか、志賀紀豊綱作『燕雀論』（寛政元年序）の記述も取り上げている。

通宿の隣に在留場の者三十郎、通迄中車追善摺物を貰ふゆへ、目録明日通より遣ハす[18]

（柳沢信鴻『宴遊日記』別録巻一）

八百蔵死せしと聞しかば、早くも彼がかたちを描かき、版におろし、其様水上下を着し、手に筆と短冊をもち、柳をかき、傍に「秋風や土となり行露の玉」といへる一句をしるし、其うれたること日々千万の数を以てし[19]」

（志賀紀豊綱『燕雀論』）

そもそも、歌舞伎役者の追善物の歴史は貞享から元禄期に遡るとされる。松崎仁氏によると[20]、その歴史の過程で最期物語と称される「人気役者が死ぬと、その死の「真相」を語り、あるいは死後の消息を語る」話が生み出されたという。そして、その話型には「歌舞伎若衆の最期物語に著しい説話の型として、女または男の若衆への執心が死を早める」ものがあると説明する。また、棚橋正博氏によると[21]、追善草双紙の嚆矢となったのは、二代目瀬川菊之丞の死に題材をとった柳川桂子作、鳥居清長画『籬（まがき）の菊』（安永二年刊）である。そして、その『籬の菊』に影響を与えたのが、後述する風来山人こと平賀源内作『根南志具佐』、『根無草後編』（明和六年刊）であったという。

安永六年に刊行された二代目八百蔵の追善本としては、門田候兵衛作『市川八百蔵死絵の写絵きのふけふ』（中山清七板）、滑稽本『中車生死草白露（くさのしらつゆ）』、『其の面影』、『冥土のみやげ』の他、似山貫祢作桃江画『中車追善蟹牡丹』（板元不明、同年序）等の小本類[22]や、画者不明『中凋花小車（なかにしぼむはのをぐるま）』（鶴屋喜右衛門板）追善久陽作清経画『〔中車光陰（こういん）〕』（柱題：中車光陰／板元不明）、蓬莱山人亀遊画作『江戸贔屓（えどびいきはつぴやくやちよう）八百八町』（松村弥兵衛板）といった追善草双紙[23]が複数挙げられる。こうした戯作の刊行は二代目八百蔵の話題性を更に高めることになった。『龍都四

国噂』の場合、刊行時期からすると話題の鮮度は少々落ちるものの、まだ人々の記憶に新しいものであったはずだ。[24] いずれにせよ、本作も二代目八百蔵を取り上げていることから、このような追善物の影響を受けていたと考えられる。

そこで、『龍都四国噂』における追善物の影響について検討するため、二代目八百蔵を扱った追善草双紙と比較していく。

先に挙げた『中凋花小車』、『〔中車光陰〕』、『江戸贔屓八百八町』三作について、高橋則子氏はいずれも「最期物語・冥途での芝居興行・地獄破り説話という、芸能の伝統を踏まえた特徴を兼ね備えている」[25]と述べ、その第一にやはり最期物語を挙げている。高橋氏の挙げた三つの特徴について、まずは要約しておきたい。

一つ目の「最期物語」では、八百蔵が生前多くの贔屓の女中たちの心を惑わせた罪により、地獄、冥途に呼ばれるという設定になっているが、それに加えて『中凋花小車』では閻魔自身が八百蔵見たさに呼び寄せ、『〔中車光陰〕』では閻魔の養子弁天おとよが八百蔵に恋病のために閻魔が呼び寄せる、というように地獄からの呼び出しがあったことも夭折の原因とされている。

二つ目の「冥途での芝居興行」は、地獄または極楽で亡くなった役者が生前評判となった役で興行するというもので、八百蔵が地獄で以前に亡くなった名優と共演するという展開が見られる。「死んだ役者があの世でも歌舞伎を演じているという発想も比較的容易に思いつきやすかったようで、元禄期から役者評判記に頻繁に見出すことが出来る」という。

三つ目の地獄から極楽へ上がる「地獄破り」については、狂言『朝比奈』にある、閻魔を従わせて地獄から極楽に案内させるという「朝比奈地獄破り」の話型に由来するもので、三作品とも八百蔵が芝居（茶番も含

図３『竜都四国噂』五丁ウ六丁オ（国会図書館蔵）

む）を通して極楽へ行く機会を得ている。

以上のことを踏まえて『龍都四国噂』の展開と照らし合わせていくと、三作の追善草双紙の話型に重ねられるところが少なくとも二つ挙げられる。

一つは、佐治兵衛猿が竜宮へ行き、声色を遣う芸を披露する場面（図3）。この六丁オの場面で安永七年三月一日に他界した四代目団十郎の真似事をしている。[26] その前五丁ウには「身ぶり声色じゃ。今は八百蔵じゃ、次は団十郎親玉じゃ。」という台詞があることから、佐治兵衛が既に亡くなっている八百蔵や団十郎を次々と演じていた様子が分かる。本場面は、異界において故人の役者の芸を再現する興行をしているとも読み取ることができる。そして、そのことは、たとえ物真似であっても「冥途の芝居興行」に繋がるような要素があると言えよう。

そしてもう一つは、乙姫に会うために八百蔵に扮した佐治兵衛猿の「乙姫さまを見ぬ恋に憧れ、日本をば死んだ分にして遥々と参りました」という台詞である。この台詞には最期物語由来の追善草双紙に見られる、役者の死因や死後の世界での様子を追究する姿勢がとられている。

つまり、『龍都四国噂』に物語の素材として二代目八百蔵が取り込まれたことで、佐治兵衛猿の竜宮をめぐる一連の場面は読者に役者の地獄めぐり譚を連想させるような仕掛けになっていたと考えられるのである。喜

三二が追善物の流行自体を踏まえたとするならば八百蔵の追善草双紙と同様、従来の追善物の型を取りつつ、地獄を竜宮に置きかえて物語を展開させている可能性が見えてくる。

㈢竜宮と地獄の類似性

では、当時の人々や喜三二の認識として、地獄は竜宮に置きかえ得るものだったのか。竜宮に材をとる物語は日本の中に複数存在するが、ここでは浦島伝説や『平家物語』、玉取り説話の幸若舞『大織冠』を取り上げることで竜宮と地獄の関係を見ていく。

まず、古くは『日本書紀』『丹後国風土記』や『万葉集』に見られる「浦島伝説」であるが、もともとこれらには「竜宮」という表記はなく、「蓬萊（蓬山）」や「常世」とあった。折口信夫はこの「常世」が「死の国」と重ねられていたとし、その常世が竜宮に言い換えられたことについて言及している。[27]

そして、「竜宮」の概念や日本での享受について、恋田知子氏は「海や水の世界を司る竜王の支配する場であり、インドや中国で発達し、日本では平安時代以降、仏教の普及とともに浸透していった」「古代の「常世」や中国神仙思想の「蓬萊」に比べ、「竜宮」はきわめて仏教的色彩の濃厚な異郷として語り継がれてきた」[28]と述べる。

また、浅野祥子氏も「常世」が「不老不死の国」であり、「死の国、黄泉の国とも同一視される異界」であって、「こういう二つの性格をもった異界のあとをうけて「龍宮」という名称が使われたということは、龍宮に、そういう二面性が認められていた証とみてよい」[29]と述べ、竜宮と仏教思想、ないし死後の世界を結びつける一例として、覚一本『平家物語』灌頂巻「六道之沙汰」を取り上げる。入水した安徳天皇らが竜宮に行き、

竜蛇の苦しみに悩まされるというお告げを建礼門院が夢に見る話であるが、先行研究では竜も畜生道に属し、『往生要集』でいうところの「三熱の苦」を受ける者とされてきたことが背景にあると解釈されてきた。[30]

玉取り説話の幸若舞『大織冠』においても、八大竜王の総王が「我らは、既に海底の竜王たりといへど、五衰三熱隙もなく、億劫にも会ひがたき」と語っており、竜王らが「三熱の苦」によって成仏できない苦しみから解放されるために「五寸の釈迦の霊仏」（面向不背の玉）を奪おうとする。[31] ちなみに『龍都四国噂』でも八大竜王や乙姫らが面向不背の玉を拝む場面があり、これもまた「三熱」の苦を背景としていると考えられる。

このように、近世以前より竜宮が仏教的世界観の中に存在し、死後の世界であって苦しみを受ける場所として描かれてきたことからも、竜宮と地獄が近しい関係にあると認識されていたと確認できよう。そして、その認識は江戸文学の中でも受け継がれている。

例えば、『根南志具佐』五之巻においても、龍王は閻魔王の配下にあって、瀬川菊之丞を地獄に連れてこさせるために、閻魔王が龍王に命令する場面がある。また、黄表紙『金生水洞幹（きじょうすいほりぬきいど）』（十返舎一九作画、寛政九年〈一七九七〉刊）の「いづれの掘り抜きにや、すぽんと抜けた所が地獄と竜宮の境へ穴を空けたり。元より地獄は世界の地の底にて、竜宮は海の底なれば、地獄と竜宮は隣同士にて」とあるのも、竜宮と地獄の関係の近しさを示す例[32]とされている。

以上のことから、喜三二が『龍都四国噂』の世界で地獄の話型を竜宮に置きかえることは難しくなかったと考えられ、追善物の話型を踏襲しているという見方も可能だといえる。また、『根南志具佐』を意識していたとするならば、現世と地獄、竜宮ではなく現世と竜宮というように、黄表紙という短い小説の中で構造を簡略化したというのも考えられることではないだろうか。

ところで、㈠の末尾において、『其昔龍神噂』との共通点については先述した。本章最後に相違点についても述べておく。共通点として挙げたのは八百蔵を作中に取り入れることにより、相思相愛の関係にある男女（乙姫）の間に割り込むような構図を生み出しているというものだった。だが、『其昔龍神噂』において、八百蔵を取り上げたのは百足が乙姫に言い寄る一場面のみである。しかも、話題となった狂言の八百蔵の台詞に言触れる程度で、八百蔵関連の要素を持ち出すのも唐突である。それに比べ、『龍都四国噂』では当時話題となった八百蔵の死や追善物のまで踏まえられており、物語中盤の「一枚絵の八百蔵」という伏線から終盤の展開まで、八百蔵の存在をより大きく取り上げている。そこに喜三二の巧みな構成力が発揮された『龍都四国噂』独自の物語が生まれていると言える。

三　『根南志具佐』の影響

㈠源内との関わり

平賀源内は戯作界に多大な影響を与えた人物であって、石上敏氏によって安永・天明期、そして文化期において「江戸戯作の開祖」という認識を持たれていたことが言及されており[33]、喜三二もまた源内の影響を強く受けた一人であったとされる。

『龍都四国噂』刊行の前年、安永八年に喜三二が滑稽本『古朽木』を執筆した際には『根南志具佐』に学んだとされ、自序に「下手談義下手にあらず。根無草根無きにあらず。共に根のある上手の作にして。亦宝暦始終の華也[34]」と記したことは先行研究において度々言及されてきた。また、黄表紙では『太平記万八講釈』の画

中に平賀源内らしき人物を登場させていると井上隆明氏は指摘している。[35] さらに、源内の遺文集『飛花落葉』（天明三年序）にも喜三二の名で序文を寄せていることも知られている。石上氏は喜三二が源内門人の一人であったとし、風来山人作『天狗髑髏鑒定縁起』（安永五年刊）序者「門人戯蝶」や同作『力婦伝』（安永五年成立）跋者「栄良軒朶老」の戯号もまた喜三二のことであるとする。しかも、喜三二が戯作者として活躍し始めた安永五年から、吉原細見序文が源内から喜三二へと担い手が移されており、このことが二人の関係を示すとも指摘している。[36]

こうした文学的なつながりのほかにも、喜三二が秋田藩に属しており、源内が安永二年に秋田藩主の依頼で秋田領内に鉱山調査をしたことなどから、直接の交流があったかを示す記録は未だに発見されていないものの、実生活の上での交流があった可能性があるとされている。[37]

㈡『根南志具佐』との比較

『根南志具佐』は追善草双紙に影響を与えたものであって、『龍都四国噂』でも追善物の踏襲という面から、井上隆明氏が言及したように『根南志具佐』を意識していた可能性がある。ここではその可能性を補強するものとして、両作の共通性について二点挙げる。

まず、絵を介して恋に至るという点がある。『根南志具佐』一之巻では、左記のように、閻魔が瀬川菊之丞の絵姿を見て恋に落ちる。

閻王は不機嫌にて、「蓼食う虫も好き〻」とは其方が事なり。しかしおれは若衆をみるは嫌なれば、絵の有る内は目を閉て見まじき程に」（中略）閻王覚へず目をひらき御覧じけるに、越なふあてやかなるに心

動き、初笑（ひ）しことはどこへやら、只茫然と空蟬のもぬけのごとくになりて、覚（え）ず玉座よりころび落（ち）給へば[38]

一方の『龍都四国噂』でも、乙姫は予てから八百蔵の一枚絵を見て惚れ込んでいたため、「猿回しの亀、絵に描きし八百蔵に似たりとて、人知れず思ひ染め」たとある。

『龍都四国噂』で八百蔵に対する執着を表す乙姫の恋のきっかけにわざわざ一枚絵を取り入れたことには、やはり『根南志具佐』の趣向が意識されたのだろう。

二つ目に、境界を越えて出会いを試みるということがある。『根南志具佐』では、「瀬川菊之丞が絵姿に閻魔大王うつつをぬかし、龍神に勅定」して異界へ引き込もうとするが、一方の『龍都四国噂』では、八百蔵に扮した佐治兵衛猿の「乙姫さまを見ぬ恋に憧れ」、自ら竜宮へ来訪する。つまり、最期物語と同様『根南志具佐』では、地獄（異界）の者が現世の役者に憧れて自ら世界へ引き込もうとし、『龍都四国噂』では佐治兵衛猿による茶番であるが、自ら異界の者に会いに来ることになっているのである。立場は逆転しているものの、恋の成就のために死をもって異界を行き来することにおいて類似性が見られよう。

以上のことから、『龍都四国噂』では、佐治兵衛猿が八百蔵の物真似をすることによって、追善本に見られるような地獄めぐりの話型が踏襲されていると考えられる。

その他、物語の素材が重なる部分があるため、提示しておく。まず、「龍宮の玉を取（ら）んと、海底に飛（び）入（り）て命を捨（て）たる蜑人にも異なり」（『根南志具佐』一之巻冒頭）とあるような[39]、玉取り説話について触れているところである。そしてもう一つは、「昔も乙姫病気の時、猿の生胆の御用に付（き）、水母に仰（せ）付（け）られしを、いはれぬ口をしゃべりし故、龍神のいかりを請（け）、筋骨ぬかれて」（『根南

志具佐』五之巻）とあるところで、井上氏の指摘にもあった「猿のいきぎも」に関するところである。

四　作品評価

『龍都四国噂』中で取り上げられる二代目八百蔵は、本人が登場するのではなく、あくまで亀が他人の空似であることと、猿になった佐治兵衛が扮することによって描かれる。しかし、この「八百蔵」が既存の物語の繋ぎ役になっており、また、『龍都四国噂』に追善物らしさを付与する者として、物語の構造的な意味における重要な役割を担っていると考えられる。

また、本稿では先行研究で言及されてきた源内と喜三二の繋がりを再確認し、『根南志具佐』と『龍都四国噂』との共通性について述べた。役者の死に纏わる物語展開や素材の類似性などをみると、『龍都四国噂』が『根南志具佐』の影響を受けているのは間違いない。源内に対する敬意が表れた喜三二の著作はこれまでも複数指摘されてきたが、本稿であえて強調するならば、喜三二作品のうち、源内の影響が見受けられる黄表紙の例は希少であり、『龍都四国噂』はその一例として見るべき作品ということである。

最後に、『龍都四国噂』の評価について、喜三二の作風の観点から改めて述べる。

浜田義一郎氏は喜三二の作風について、「着眼が鋭く創意に富むが説得力に欠ける春町作に、ユーモアとギャグを加えて悠々と変奏曲を奏でるのが、喜三二の特色」であるとし、一方で「機知的な作家だが、それを鋭く表現するすべをしらない。悠々とそれを玩味し、ゆっくりと語る息の長いところに比類のない説得性がある」と述べる。(40)

確かに、『其昔龍神噂』では、当時あった鳥山検校のような贅沢な座頭らの遊廓の遊興や、座頭金の不当な高利貸しによって夜逃げした旗本の事件に取材している。それに対し、『龍宮四国噂』で取り上げられる時事的な内容としては、「とんだ霊宝」や二代目八百蔵の死など風俗が中心である。しかも、先述したように安永六年の出来事であるから、安永九年で取り上げるべき話題としては若干遅れている感じもある。ただ、安永六年当時に八百蔵の追善物が多く出回ったこと自体を取り上げている可能性、安永七年の四代目団十郎の死や『其昔龍神噂』などを受けての作である可能性を考慮すると、安永七年中には既に構想ができあがっていたのかもしれない。ちなみに、源内は安永八年十二月十八日（西暦一七八〇年一月二十四日頃）に没していることから、『龍都四国噂』の刊行とは一ヶ月ほどしか間がなく、喜三二が執筆の段階で源内の死を意識していたとは言い難い。[41]

いずれにしても、『龍都四国噂』の主軸はあくまで既存の童謡、童話、玉取り説話の筋書きをなぞりつつ、謡曲「海士」の悲劇的結末部分を喜劇的でナンセンスな笑いに改変していく方向で書かれている。当世の事情に切り込むような鋭さや新鮮さを強く出す感じはあまりないが、大らかな態度でもって描写しているからこそ、時代を超えても分かりやすい面白さがある。何より、既存の物語の魅力を活かしつつ、丁寧に繋いで筋の通ったひとつの物語へと再構成されているところは巧みであり、そこに役者の地獄めぐり譚を思わせる要素をさりげなく入れることで物語に奥行きを出している点は、喜三二の技量が発揮されているところであろう。

註

（1）浜田義一郎「朋誠堂喜三二ノート」（『江戸文藝攷』岩波書店、一九八八年）／井上隆明「喜三二伝考異」（『近世文藝』十四号、一九六八年）／「我おもしろ」下の巻（『江戸狂歌本選集』東京堂出版、一九九八年）

（2）浜田注一前掲書／中村幸彦「草双紙の諸相」（『中村幸彦著述集』第四巻近世小説史、中央公論社、一九八七年）／水野稔『黄表紙・洒落本の世界』（岩波新書、一九七六年）／井上隆明『喜三二戯作 本の研究』（三樹書房、一九八三年）

（3）井上注二前掲書では、恋川春町画の可能性を示す。

（4）喜田川守貞著『守貞謾稿』（『近世風俗志』五巻、岩波書店、二〇〇二年参照）に「江戸にて声色と云ふ。京坂に物まねと云ふ。俳優の声を擬する小口技なり」とある。図3五丁ウに描かれている札から、安永・天明期に中州新地で評判となった声色づかいの大道芸人、松川鶴市に当て込んだものと知れる。

（5）井上注二前掲書／棚橋正博『黄表紙総覧』前編（青裳堂書店、一九八六年）／中村正明「伝承童謡と黄表紙―「四国猿」を中心に―」（『國學院雑誌』第一一〇巻十一号、二〇〇九年）

（6）中村正明注五前掲論

（7）棚橋注五前掲書

（8）浜田義一郎「黄表紙雑考」（『東洋大学紀要』十四集、一九六〇年五月号）／鈴木俊幸「吉原の本屋 蔦屋重三郎」（『蔦屋重三郎』まんぼう社、一九九八年）―安永九年刊行を裏付ける資料として、『伊達模様見立蓬萊』（安永九年刊）の巻末に新板目録の広告を取り上げる。桜の木に吊るされた短 冊の一つに黄表紙の名題「龍都四国噂 上中下」が書かれている。

（9）森銑三『黄表紙解題』上（中央公論社、一九七二年）／井上注二前掲書

（10）中村正明氏注五前掲論

（11）『鐘入七人化粧』は式亭三馬作『稗史億説年代記』（享和二年刊）の名作二十三部の一つにも含まれている。

（12）作中絵の似顔表現においても二代目八百蔵と特定はできそうだ。時代の近い作で、勝川派の勝川春堂が手掛けた細

判錦絵『二代目市川八百蔵の死絵』（Chester Betty Library 蔵、一七七七年作）や、春章と同時期に似顔絵で活躍した一筆斎文調『絵本舞台扇』（勝川春章と共作、雁金屋伊兵衛版、明和七年〈一七七〇〉）に描かれた二代目八百蔵像と比較してみると顔の特徴に類似性が見られる。また、二章(二)でも触れる滑稽本『中車生死草白露』の作中の挿絵に描かれる八百蔵の姿にも似ている。

（13）本文引用は国立国会図書館デジタルライブラリー（二〇二一年七月二六日検索）https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2545197?tocOpened=1 を参照。

（14）『日本随筆大成』第一期第八巻、吉川弘文館、一九九三年

（15）中村正明「黄表紙『其昔龍神噂』翻刻と注釈」（『日本文學論究』二〇一九年三月号）

（16）伊原敏郎『歌舞伎年表』第四巻、岩波書店、一九五九年

林美一「死絵考 その上」（『浮世絵芸術』四十五号、一九七五年八月）

岩田秀行「役者絵の隆盛(一)江戸絵」（『岩波講座 歌舞伎・文楽・第四巻歌舞伎文化の諸相』岩波書店 一九九八年）

高橋則子「追善草双紙「東発名皐月落際」と市川家の芸」（『服部幸雄編寛政期の前後における江戸文化の研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇〇年）

藤澤茜「死絵に見る役者の人気」（『浮世絵芸術』一四六号、二〇〇三年）／同著『浮世絵が創った江戸文化』笠間書院、二〇一三年）

（17）浅野秀剛『秘蔵浮世絵大観 別巻』（講談社、一九九〇年）

（18）朝倉治彦、服部幸雄編集『日本庶民文化史料集成』十三巻芸能記録（三一書房、一九七五年）

（19）伊原注一六前掲書

（20）松崎仁「人気役者最期物語」（『日本の説話』五、東京美術、一九七五年所収）／同著「最期物語の変貌と元禄歌舞伎」（『歌舞伎・浄瑠璃・ことば』八木書店、一九九四年所収）

（21）棚橋正博「歌舞伎俳優追善黄表紙序説」（『帝京大学文学部紀要』二十号、一九八八年十月／（同著『黄表紙の研究』若草書房、一九九七年所収）。この論に対し、高橋則子氏は「この二つの談義本と追善草双紙の間には若干の距

離があるように思われる」ものの、「初期追善草双紙に何らかの影響を与えた可能性はある」（「初期追善草双紙考―二代目市川八百蔵の死をめぐって―」（『江戸文学』一九号、一九九八年八月）との見解を示す。

（22）伊原注一六前掲書

（23）棚橋注二一前掲論

（24）「日本文学協会第四十回研究発表大会」における発表において、光延真哉氏より、安永八年九月に澤村四郎五郎が三代目市川八百蔵を襲名したことにより、八百蔵に対する注目が高かった可能性をご教示いただいた。喜三二が八百蔵を取り上げた本作を安永九年に刊行したことを検討する上で重要な指摘である。

（25）高橋注二一前掲論

（26）岩田秀行「黄表紙『明矣七変目景清』」（近世文学研究叢書『江戸芸文攷』若草書房、二〇一九年）の脚注二七の指摘による。

（27）折口信夫『古代研究　民俗学篇第一』（「妣が国へ・常世へ」『折口信夫全集2』中央公論社、一九九五年所収）

（28）恋田知子「御伽草子が描く海」（鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店、二〇一六年）

（29）浅野祥子「龍宮について―地獄との類似性」、（『大正大学国文学踏査』十五号、一九八九年）

（30）新編日本古典文学全集四六『平家物語』四、（市古貞次校注訳、小学館、一九九四年、五二二頁脚注一〇参照）

（31）新日本古典文学大系五九『舞の本』（麻原美子、北原保雄校注、岩波書店、一九九四年）

（32）関原彩「黄表紙における龍宮描写」（『学習院大学文学部研究年報』六四号、二〇一七年）

（33）石上敏『平賀源内の文芸史的位置―戯作者としての評価・評判』北溟社、二〇〇〇年。他、源内を「戯作の祖」とすることについては明治より言われており、それについては中村幸彦「戯作論」（『中村幸彦著述集』第八巻、角川書店、一九六六年）が詳しく述べる。

（34）日本名著全集江戸文芸之部、第十四巻『滑稽本集』（日本名著全集刊行会、一九二七年）

（35）井上注二前掲書

（36）石上敏「源内門人としての朋誠堂喜三二―『高慢斉行脚日記』の世界―」（『近世文藝』七十二号、二〇〇〇年）／同著「平賀源内と吉原細見―源内門人としての朋誠堂喜三二補説」（『江戸文学』二十四号、二〇〇一年十一月）

（37）城福勇『平賀源内』（吉川弘文館、一九八六年）／井上注一前掲書「職務」／同著「源内秋田行の跫音」（『江戸文学』二十四号、二〇〇一年十一月）
（38）日本古典文学大系五五『風来山人集』（中村幸彦校注、岩波書店、一九六一年）
（39）中村幸彦注三八前掲書
（40）浜田注一前掲書
（41）石上注三三前掲書

【付記】
本稿は、日本文学協会第四十回研究発表大会（二〇二一年七月四日）にて、口頭発表したものの一部である。席上ご教示賜りました諸氏に厚く御礼申し上げます。
また、『龍都四国噂』本文における翻刻と解釈に際しては、延広真治氏はじめ近世文学研究会の皆様より貴重なご意見、ご指導を多く賜りました。心より御礼申し上げます。
図版掲載を許可くださいました国立国会図書館に深謝いたします。

A Study of the *Kibyôshi* "*Tatsu no Miyako Shikoku Uwasa*": with Special Reference to Ichikawa Yaozô II's role

FURUSHO, Rui

The purpose of this paper is to offer some opportunities of the reassessment of *Tatsu no Miyako Shikoku Uwasa* (*Shikoku Uwasa*,「龍都四国噂」), written by Kisanji Hôseidô（1780), by analyzing the story, and expanding the interpretation.

One of our attempts here, is to focus on Yaozô and reconsider his role in the overall structure of the story. Yaozô was a kabuki actor, whose formal stage name, Ichikawa Yaozô II. He died in 1777 at the age of 43. The reason why we emphasize Yaozô is, he was so popular an actor that his death was missed by many fans, especially by women in Edo, and his action was taken up in *gesaku*, one of the entertainment literatures. In the structure of *Shikoku Uwasa*, the topic of his death was picked up with an important meaning. It seems his death was the key to the revaluation.

As our supplement, we should especially see how *Shikoku Uwasa* was influenced by *Nenashigusa,* in which the kabuki actor's death was told, by compering both works. The latter was written by Hiraga Gennai in 1763. Therefore, we could confirm that Kisanji wrote *Shikoku Uwasa*, being conscious of Gennai's *gesaku*.

（日本語日本文学専攻　博士後期課程三年）